

2人で書き上げ 広がり深まる

〈評〉久野雅幸・詩人（天童市）

高階紀一、松下育男共著

「平易で、せつなく、深い」詩を書くという点で、現在の日本の詩人の中で抜きん出た存在。それが高階紀一と松下育男である。この2人の詩人が、「共詩」と言われる書き方で書き上げた詩9編を収めた詩集である。

「共詩」は、高階による造語である。「二人で一つの詩を作ろう」という意識を強く働かせて「高階「あとがき」より」いる点で、特にそうした意識をもたずに複数の詩人が交替して詩句を連ねていく「連詩」とは異なる。例えば、全ての連が5行ずつで成り立っている詩を作ったとき、「一人二行から三行ほど」（同）で交替している。連の途中での交替も繰り返し行なったわけである。そして、実際のところ、どの詩においても、高階による詩句と松下による詩句を判別することは不可能である。

さて、「共詩」という書き方をすることによって何が獲得されたのだろうか。

各詩が「広々とした、豊かで、奥行き深い、イメージの展開をもつ」詩となったことを、特筆すべき成果としてあげたい。

1人で書く場合には、書き手は、イメージの方向性や視点を、たとえ意識によるイメージの制御を避けるような書き方をする場合であっても、最終的には自分で判断し、到達点を決定して、一編の詩を書き上げる。

しかし、2人で書く場合には、そうはいかない。2人で書くことによつて、イメージは、簡単には行き止まる（収まる）ことなく、次々に新しい視点や展開を得て、広がり、深まる。「共詩は、思いもしなかった路地へ私を導いてくれた」と松下は言う（「あとがき」より）。「路地」という言葉は、象徴的である。迷い込んで、たまたま行き着いた、不思議な魅力をもつ路地のような奥行きが各詩にある。

ある詩は「絵のない絵本」のようであり、ある詩は「言葉による劇」である。総じて、「せつなく、深い」「イメージの、変化に富んだ展開に魅了される。」「手をふる」と「サカナが落ちた」胸の奥の／＼とてもしきゅう／＼だったところから／ありふれたいつもの川へ／いつか／君のいる海へと続いていく川へ（「サカナの泳ぐ日」最終連）

共詩 空から帽子が降ってくる



濡標
1620円